

第3 イエスの目で人々を見る

【暗唱聖句】

「イエスは、『わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう』と言われた」 マタイ 4 : 19

【日曜日・二度触れる】

イエス様はベトサイダで一人の盲人を癒されました。この物語から伝道について様々なことを学ぶことができます。まず、「人々が一人の盲人をイエスのところに連れて来」（マルコ 8:22）たと書かれてあります。盲人は誰かが連れて行ってくれないと、自分の力でイエス様のもとに行くことができません。同じように、多くの人たちはイエス様のもとまで連れて行ってくれる誰かを必要としています。伝道とは、イエス様の仲介役となることです。二つ目に、盲人を連れてきた人々には、イエス様に対する信仰があったということです。私たちが誰かをイエス様のもとに連れて行くときに、必ず素晴らしいことを起こると信じるのが大切です。3つ目に、彼らはイエス様に「触れていただきたいと願」いました。盲人のために願った、ここに愛と信仰があります。

イエス様が盲人の目に唾をつけ、両手をその人の上に置いて、「何か見えるか」とお尋ねになったのですが、最初はぼんやりして「人が木のように見える」と答えます。そこでもう一度イエス様が盲人の目に両手をあてると、今度ははっきりと見えるようになります。イエス様はこの盲人に癒すにあたって、2段階を踏まれたことがわかります。これはイエス様の元に連れて来られても、すぐにイエス様がわからないことがあるということを霊的に教えています。しかし、諦めず続けていくうちに、やがてはっきりとイエス様のことがわかるようになってくるということです。

【月曜日・受容することの教訓】

イエス様が人を見る時、しばしば今のその人の状態ではなく、その人がやがてどのような人物になるのかを見通すように接しられました。たとえば井戸のそばで、サマリヤの女性と接しられたときに、それがよく表れています。サマリヤ人というのは、紀元前 722 年にアッシリアによって北イスラエルが陥落した後、アッシリアからのサマリヤに移りすんだメソポタミア人たちと残留イスラエル人たちとの間に生まれた人々のことですが、ユダヤ人との混血であったということや、ユダヤの伝統的な宗教儀式に偶像崇拜を持ち込んだり、ユダヤ人に対抗する祭司職を設けたり、さらにゲリジム山に神殿を建設するなど、ユダヤ人とサマリヤ人との間には、民族的かつ宗教的な確執は根深くあったのです。しかし、そのような確執など一切気にすることなく、イエス様はサマリヤの女性に、「水を飲ませてください」と頼むのです。人から何かをお願いされるということは、信頼されているということでもあります。いつもはユダヤ人から馬鹿にされることが多かったし、しかも男性が女性に頼むなんて、不思議に思ったことでしょう。そもそもこの女性は夫の問題で一目を避けるように生きてきた女性でした。だから、そんな自分が受け入れられているということは驚きだったのです。しかし、結果的にそれが彼女の心の戸を開く最初の一步となっていったのでした。イエス様とのほんの短い会話のあと、彼女はまるで人が変わったように、イエス様のことを伝えます。イエス様にはこのような彼女の姿を予見していたのでしょう。わたしたちがここから学べるのは、伝道で大切なことは、神様のことをまだ知らない今の姿ではなく、イエス様に救われた後の姿を想像して受け入れていくことが大切だということです。

【火曜日・あなたがいる場所から始める】

イエス様は昇天される前に弟子たちに対して、「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」（使徒言行録 1 : 8）と言われました。これは、伝道はまず今いるところから始めなさいということです。そこを飛び越えていきなり世界に飛び出すのではないのです。やがて御心ならば、道が開かれて次のステップを踏むときが来ます。12 弟子の一人アンデレは、イエス様に出会った喜びを、まず兄弟のペテロに伝えました。わた

私たちもそれぞれ今いるところから、もう一度福音を述べ伝えるチャンスはないか探っていくことが大切です。そして、意識的に好意的で思いやりのある態度で関係を築いていくことです。

【水曜日・難しい人たちと接する】

つまりイエス様が人々を霊的なまなざしで見つめ、人々の心の奥にある声を聞いたように、わたしたちも霊的な感受性を豊かに持つことが大切です。これを教会成長の目あるいは耳と言います。聖霊がこの霊的な目や耳を養い、導いてくれます。イエス様の事例を挙げてみましょう。ペテロとヨハネを弟子にするとき、彼らが漁をしているのをご覧になって、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われました。(マタイ 4:19) 漁師は魚をとる喜びを知っていました。もし漁師ではない人にこのように言っても、それほど魅力的な言葉には響かないことでしょう。また、イエス様は律法学者が適切な答えをしたのを見て、「あなたは、神の国から遠くない」と言われました。(マルコ 12:34) この言葉は、神の国を追い求めている律法学者にとって、何より嬉しい言葉だったのではないのでしょうか。また、死にゆく十字架の死刑囚には、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われました。(ルカ 23:43) これほど適切な言葉は他にありません。つまり、人を見て、あるいは状況を見て、どのような言葉を必要としているのか、判断していくことが大切なのです。どのような難しい状況になる人に対してでも、聖霊がそのとき必要な言葉を与えてくれます。

【木曜日・摂理による機会に気づく】

私たちは時々、神の摂理という言葉を使います。神の摂理とは、すべては神様のご計画、神様のご支配の中で起こっているという考えです。あまりにも見事に物事が進んだり、救いの御業が起こったりしたときなどに、しばしば私たちはそこに神様の摂理を感じます。第二コリント 1:12, 13 で、パウロはトロアスに言った時、「主によってわたしたちのために門が開かれていた」と言っています。つまり、トロアスで福音を述べ伝えることができたのは、偶然ではなくそれが神様の摂理だったからだと理解していたわけです。また使徒 8 章に、エチオピア人の宦官が聖書の意味がわからず困っていたとき、フィリポが不思議な方法で突然現れ、彼を救いへと導いた物語が出てきます。背後では神様の御心を成し遂げるために、目に見えない御使いが働いており、天使自身の力で救いに導くことも可能でしたが、人が同胞のために働くように計画されておられるので、フィリポが遣わされたのですが、これもすべて神様の摂理と言えます。私たちは、神様の摂理の中にあることを知るとき、とても励まされ、信仰が強められます。それは神様の確かな存在をそこに感じるからです。そして、神様のご計画の中に歩んでいることを知るからです。